

ウルジャ河の戦い  
—チンギス・カンの前半生 その5—

The Battle of River Ulz  
—Former half-life of Chinggis Qan No.5—

2020年5月5日

May5,2020

安田公男

Kimio Yasuda

URL : [chinggis-ff](http://chinggis-ff)

### はじめに

前報でテムジンはジャムカと戦って敗れたが、それはそれほど大きな戦いではなかっただろうと推測した。負けたのに、テムジンを慕ってやって来る者達がその後も続いた。その理由はテムジンのやさしさと包容力であると史書は記している。大きくなったテムジン集団の行動が、ウルジャ河の戦いとして史書に現れるまでを扱う。

## 1. 史書の比較

### 1.1 元史

番号	記事内容(抄)
1	テムジン(チンギスハーン)は諸族セチェ、タイチュとオノン河に会し宴をした。セチェの母クルジンと次母エベゲイへの馬乳酒の配り方を巡って悶着が起き、料理係のシキルが笞打たれた。ベルグテイは馬の管理をしていた。セチェ側の従者が馬の止め革を盗んだので捕らえた。セチェ側のボリが怒ってベルグテイを切りつけた。ベルグテイは大事な時だからと我慢したが、テムジンは承服しなかった。従者たちは馬乳酒を混ぜる棒で戦いテムジン側が優勢となり、悶着の原因を作った二母を拘束した。セチェ側が謝ったので、二母を還した。
2	その時、タタル部族のメグジン・セウルトが金国に背き、將軍完顔襄が北に追ってきた。テムジンはこれを聞いて兵を挙げ、セチェにも来るように伝えたが、六日待っても来なかった。兵を進めてメグジン・セウルトを殺し輜重を得た。
3	テムジンの部下がナイマンに襲われた。これを討つために 60 人を遣ってサチャ・ベキから徴兵しようとした。しかし以前の恨みから 10 人を殺し、50 人の衣服を奪って帰した。テムジンは怒って言った。「前にベルグテイを傷つけ、今又敵に味方し我を凌ごうとするか」。兵を進めその部衆を破った。セチェとタイチュは妻子と共に逃れた。数ヶ月後テレトの狭間に追って殺した。

### 1.2 集史

番号	記事内容(抄)
1	テムジンは母ホエルンと兄弟のカサル、オッチギンと共に、キヤト・ユルキン氏族のセチェ、タイチュとオノン河に会し宴をした。(この後、元史とほぼ同内容)。この時突然、金国の將軍完顔襄が、タタル部族のメグジン・スルト追ってきたとの知らせが届いた。
2	テムジンは直ぐに近くの前軍を招集し、オノン河地区にいるタタルに出兵した。ユルキン氏族にも出兵するように伝えたが、六日待っても来なかった。集めた軍勢でウルジャ地方のメグジン・スルトを殺しその軍隊を破って輜重を奪った。このことは金国の意に叶い、テムジンに対し大將軍の意味であるジャウト・クリの官号が、ケレイトのトオリルには一国の君主たる王汗の封号が与えられた。
3	戦利品の一部をユルキンにも分けようとして赴いたが、却ってそのうちの 10 人が殺され 50 人の馬が奪われ服が裂かれた。テムジンは言った。「昨日彼らは剣でベルグテイを傷つけたが、我々は仲良くしようと言った。ところが彼らは敵と組んでしまった。手をこまねいておられようか」。怒って出兵しドルアン・ボルタク地方の彼らを壊滅させ、土地を奪った。セチェとタイチュは妻子と共に逃走した。

### 1. 3 元聖武親征録

番号	記事内容(抄)
1	テムジンに母ホエルン、カサル、オッチギンの兄弟、セチェ、タイチュ等とオノン河の林で宴をした。(この後、元史とほぼ同内容)。
2	このような成り行きの時、タタル部族のメグジン・シャリトが金国に背き、將軍完顔襄が北に追ってきたとの知らせが届いた。テムジンは兵を發してこれを討たんとし、ユルキン氏族にも知らせたが、六日待っても来なかった。集めた兵を率いて攻め、メグジン・シャリトを殺し、財貨を奪った。金国はテムジンをジャウクル、ケレイト部長トオリルに王の称号を与えた。
3	この時、ハレント澤にいた我が衆がナイマンに襲われた。テムジンは怒って、「以前ベルグテイを傷つけたのに敢えて和を結んだが、今彼らは敵に味方し我を凌ごうとしている」と言い、兵を發しドイバン山に至りユルキンを下した。セチェとタイチュは妻子と逃れた。

### 1. 4 元朝秘史

番号	記事内容(抄)
1	ジャムカが引き上げた後で、その陣営からいくつかの氏族がテムジンの元にやって来た。これをテムジンは喜び、母ホエルン、弟カサル、ジュルキン氏族のサチャ・ベキ、タイチュらとオノン河で酒宴をした。(この後、元史とほぼ同内容)。その時、タタル部族のメグジン・セウルトが金国に背き、將軍完顔襄が北に追ってきたとの知らせが届いた。
2	これをケレイトのトオリルに伝えると出動してきた。ユルキン氏族にも伝えたが、六日待っても来なかった。二人は共にタタルを攻めて大将のメウジン・セウルトを殺し、白銀の乳母車や大珠のついた布団を奪った。金国の將軍は大いに喜び、テムジンにジャウト・クリの称号を与えた。ケレイトのトオリルには王の称号を与えた。
	その時テムジンの留守營はハリルトウ湖にあった。残った者にジュルキンが襲い10人を殺し50人の衣服を剥ぎ取った。テムジンは直ぐに出兵し、コドエが島の七つの丘にあったジュルキンを襲った。サチャとタイチュは逃れたが、追いかけてテレットウ隘口でとらえて殺した。

## 2. 考察

### 2.1 宴の実態 (各史書1)

史書の記述は、ジャムカとの戦いに続いて諸人の帰順があり、この宴に続く。宴の主催者はテム

ジンだが、集史、親征録、秘史では母のホエルンを筆頭に弟たちの名も上がっているの、一家挙げての重要な宴だったことが分かる。開催理由は秘史だけに書かれていて、ジャムカに負けたのに部民が増えたのをサチャ・ベキらと喜ぶためとある。だが、この宴は1196年のことと分かるので、ジャムカに負けた直後ではあり得ず何年かの時を置いての話である(1)。そして、セチェの母たちはテムジン方の食事係をむち打ち、ブリ・ボコはベルグテイを刀で傷つけ、従者たちも木の枝で打ち合いをする。喜びあっているような雰囲気は全くないから、秘史の理由は後世のこじつけである。テムジン側とジュルキン側だけしかいないのならば喧嘩別れをすれば良いだけであるが、そうは出来ない理由があったのだろう。サチャの母たちがもめ事を起こしているのは、イエスゲイの死の翌年、先祖の祭りの席にホエルンが遅れた時、先々代のカンであったアンバカイの未亡人ともめた末にホエルンが放逐された、とある秘史の記述を思い出させる。当然そのことを知っていて二婦人は騒いでいるのだから、その時と同じように、臨席している他の人々に自分たちの不満を訴えようとしているのだ。どんな人々がいたのかと考えるならば、これもその時と同じように、部族の領袖達であろう。彼らはテムジンを支持しており騒ぎにも動じなかったので同席が記されていないのだ。そのような宴をオノン河畔で行っているのはクトラ・カンの就任時を思わせるから、これはテムジンがカンに推戴された時の宴であったのに違いない。だから、弟のベルグテイは屈辱を我慢しようとしたのだ。サチャの母たちは、今度はこちらがカンになる番なのに、とくらい内心で思っていて騒いでいるのだ。

この宴の前まではクトラの息子のジョチが全モンゴルのカンであった。彼が亡くなった後はテムジンがキヤト氏族最大の勢力者となっていたが、タイチュートとはうまく行かない。部族全体のカンが決められないが何時までもカンなしでは済まされないの、キヤト氏族だけでもカンを推戴するしかないとの意見に大勢が決し、最大実力者となっていたテムジンのカン就任となっていたと考えられる。

このような騒動はあったが、テムジンは35歳の時、初めてキヤト氏族を束ねるカンに就任した。夫がかなえられなかった夢が息子で成就してホエルンはうれしかっただろう。カンを推戴する儀式は少し暖かくなった春に催されるようなので、宴があったのは現在の4月から5月頃だろう。場所はオノン河にホルホ河が合流する地点であろうか。それが終わった頃、金軍がタタルの一軍をウルジャ河沿いに追い上げてきたとの知らせが届く。

## 2.2 金軍の動き

### 2.2.1 行動時期

遊牧民が農耕地帯へ侵攻する時期は、通常冬であることが知られている。遊牧民は家畜が子を産む春が忙しい。夏秋でそれを育て、冬先にそれを処理して冬の間の保存食料とする。食料があり馬も太っている冬に作戦行動をとる。逆に、襲われる側が反撃をするなら春から初夏の攻撃が良い。子畜の生育を阻害できれば彼らの生産活動を邪魔できる。金軍の北方草原地帯への軍事行動に5、6月といった時期が散見されるのは、そういう目的があったからだろう。白石は戦いの時期を陰暦の4月末から6月中旬と推定している。4月末なら、前項で述べた宴開催の推定時期と一致する。

### 2.2.2 移動経路

金軍は支軍の多泉子（タムサグ・ブラグ）方面軍と東軍、本隊の西軍とに分かれてヘルレン河流域まで進んだ。史書の記す九峰石壁碑文がヘルレン河南のセルベン・ハールガに残る。白石の論文によって発見の経緯から解読の結果まで詳しく知ることが出来る(2,3)。各軍の復元進路地図も論文にあるが、筆者の考えは少し異なるので新たに提示したい。金史の記述から次のようなことが考えられる。

①分かれて進んだ三軍はバルスにある契丹故城 48.06N113.35E を集合場所としていた。

②東軍は他軍より短い経路で進んだ。

西軍に連絡したのは3日間タタルに包囲された後であった。たまたま早く着いていたのではなく、初めからそういう経路を進んだのだろう。先着して、後から来る本隊の為に城の整備などをする予定ではなかったか。

③東軍は西軍、多泉子軍の進軍状況が把握できていた。

包囲された4日目に西軍に向けて使者を出した。その間敵に取り囲まれて使者を出すのが困難だったとも考えられるが、友軍が遠すぎて連絡に行くにはまだ早いと考えていて、彼らが近づいてきた頃を見計らって使者を出したのだろう。当然多泉子軍にも使者を出していたはずだ。

④連絡を受けた西軍の位置は、バルスから騎馬で1日行程ほど西の所であった。

連絡を受けた後、夜通し駆けて東軍を救っていることから推定する。この時は食料を載せた車両を残し騎兵のみで進軍したようである。十分に装備した騎馬兵の進軍速度はよく分からないが、騎馬による普通の旅の速度、1日50~70km程度と考えておく。

⑤多泉子軍もかなり接近していたが西軍よりは遠かった。

囲んだタタルに西軍が突撃する前に、援軍を待とう、との意見が出ている。援軍は多泉子軍のことであろうから、彼らの接近を西軍も分かっていた。しかし共に戦っていないから、多泉子軍は間に合っていない。

以上のような考えを元に各軍の進路を推定した。どの軍も出発地は現在の内モンゴル西ウジウムチン旗一帯であろうが、西軍の経由地であると碑文に書かれているカンチレ湖（大塩渌とも呼ばれる）、現在のエジ・ノール（額吉淖尔）付近はどの軍も経由するはずなので、そこを出発点として考えた。湖の南に城跡（45.22N116.50E）が2つ見えるのは、当時のものであろうか。モンゴル高原は植生と水に乏しいので、出発時から別々の経路で進んだと判断し、おおむね現在の道を基準に考えた。ヘルレン河到着後は各軍北岸路を進んだはずである。

西軍進路(A)：西に進み、阿拉担合力苏木から県道913、923を経て毕鲁台音淖日 45.15N114.57E にある激しい通行痕に従い方向をモンゴルのダリガンガへ変える。そこからモンゴル内の現代の道に従い、バルーン・ウルト、トゥメンツォグトを経てバヤン・オボの東40kmほどの地点 47.79N112.66E に出る。そこからバルスまで約70km。総行程約620km。

東軍進路 (B)：北に進み、現代の道に従い嘎達布基鎮からモンゴルに入る。西に向かい、エルデネツァガンより北に向かうが、マタド郡を経る現在の道ではなく、45.98N115.38E から別れて、激しい通行痕に従いマタド郡の 20km ほど西方 46.88N115.05E から始まる道に向かう。チョイバルサンを経てバルスまで約 510km。

多泉子軍進路 (C)：東ウジムチン旗を経て北に向かう。現在道路はないが激しい通行痕 46.36N117.24E をたどって現モンゴルに入り、タムサグ・ブラグを目指す。さらにチョイバルサンを経てバルスまで約 590km

図1 ウルジャ河の戦いにおける各軍の移動経路 (推定)



- |                     |                    |           |
|---------------------|--------------------|-----------|
| 1 テムジン支配域 (狭義)      | a 宴の場所 (推定)        | e チョイバルサン |
| 2 ジュルキン氏族支配域        | b セルベン・ハールガ (九峯碑文) | f タムサ・ブラグ |
| 3 タタル逃亡地域 (ウルジャ河上流) | c バヤン・オポー東         | g エジ・ノール  |
| 4 西ウジムチン旗 (アラフマキ)   | d バルス (契丹土城)       |           |

食料などを牛車で運んでいる大軍の一日の移動速度は 22km と推定されている(2)。A と B の経路差 110km は 5 日になり、①から⑥の想定によく合う。同時に同一地から出発しているわけでないだろうから数日の誤差は当然あるだろう。多泉子軍の進軍が少し遅いが、タブサグ・ブラグ方面でタタルと少し争ったらしいので、それに日数が取られた可能性がある。各軍ともエジ・ノールを起点とすれば約一ヶ月を要してバルスに到着していることになる。

### 2.2.3 タタルの逃走方向

金国の東軍と西軍の進路を見ると、タタルがいくら逃げてもバルス方面でいったん停止すると分かっていたのだろう。ちょうど近くには、イエスガイが立ち寄り、タタルに毒を盛られた地点と筆者が見なしたシラ・ケール、現在のフルンボイルの町がある。このあたりがタタルの逃げられる地域の西端と見なしていたので、それを囲い込むように西軍は進んでいる。

バルスから追われたタタルのメグジン・セウルト一派は、多泉子軍に追われてウルジャ河を遡りモンゴル領域間近で停止し、契丹が残した小さな砦のような所に立てこもったようだ。ヘルレン河の西に出られる道が東南に続いているので、更にそっちへ向かって逃げようとしていたのだろうが、モンゴル軍に行く手を阻まれたと思われる。そこから脱出しようとするれば、直接南下する道もいくつかあるようだが、出口を金軍は押さえていたのに違いない。

ウルジャ河に出たところから東に逃亡した一団もあっただろう。彼らが進めばオノン河下流のタイチュート領に接近する。だが、彼らからは攻撃を受けず却って援助を受けたかも知れない。その理由は、この戦いから 2, 3 年以内に発生したと思えるジャムカの金国攻撃の目的が、金国に協力したテムジンとトオリルの行動への反発から出たものと想像できるからである(4)。ジャムカはタイチュート側にいたから、タイチュートもタタルを厚遇しないまでも、攻撃することはなかつただろう。コレン湖の北にたどり着けばコンギラト部族領だが、彼らと敵対していたとは思えないので助かったであろう。

### 2.2.4 セルベン・ハールガの位置

金軍はバルスより西のヘルレン河沿いの何カ所かで逃亡して来るタタルを待ち構えていたであろう。セルベン・ハールガは、ウルジャ河上流からヘルレン河に出られる街道が西 20km に続いているので、もしもタタルが南下して来れば彼らを捕捉できる位置である。バルスから約 200km 離れているこの地は、河沿いに東西に展開した金軍の西端になろう。モンゴル・ケレイト軍が協力を申し出ているから、それ以上西に行く必要は無い。ここではモンゴル軍との事前打ち合わせがあつたはずだ。また、前年に金国に協力していたセチェというタタルの一派と金国は戦利品の分配でもめたことがあつたから、それも取り決めたはずだ。戦勝が決まってから完顔襄はここまで来てテムジンとトオリルを接見し称号を二人に与えたのだろう。南に 20km でバルーン・ウルトに至る街道があるから、西軍は来た道で帰国出来る都合のよい場所でもある。

## 2.3 トオリル・カン

トオリルはある程度のケレイト部衆を従えてやって来ており、その容姿もやつれたものではなかつたはずだ。そうでないと、完顔襄が王の称号を与えるはずがない。こんなことを書くのは、トオリルが各地を放浪してから帰って来て間もない頃と考えられるからである。彼は弟のエルケ・カラに国を追われ、カラ・キタイに救援を求めたが適わず、ウイグル、タングート諸国を経てわずかな供回りと共に食にも困窮した状態で帰国し、テムジンに連絡を取って救われたとある。集史にはその年が 1196 年の春と書かれているが、この戦いの最中であるので年次は誤りである。トオリルは領地を留守にして参戦しているのだから、部族支配に問題はなかつたと思える。北方草原に縁が深

く、言語も近いとされる契丹族が金軍には多く居たので、金国は彼の置かれた状況がよく分かっている王の称号を与えたはずだ。テムジンはキヤト氏族のカンにはなっていたが、モンゴル部族の半分しか治めていなかったから王の称号は与えられず、ジャウト・クリ（金朝の僕の意？）が与えられたのだろう。この2年後にトオリルはメルキトに侵攻し部長のトクトアを追いやり、3年後にはテムジンとナイマン攻撃に向かっている。ウルジャ河の戦いの時点で、既に権力は固まっていたと見なければならない。この1年後？に、テムジンの力を得てやっと権力が固まったように史書が書いているのはおかしい。後稿で考察したい。

### 2.3 ジュルキン氏族

セチュとタイチュは、アンバカイ・カンがタタルの陰謀により殺されたときに共に居て殺されたオキン・バルカクの孫である。テムジンはオキン・バルカクの直ぐ下の弟バルタン・バートルの孫であり、非常に近い親族だ。彼らがタタルを憎むなら一番憎しみが強くなるはずで、本来ならば真っ先にテムジンの元に駆け参じるはずだが兵を出さなかった。カンになりたてのテムジンを侮ったというより、タタル攻撃に加わるのが嫌だったのだろう。彼らはケルレン河添いの交通の要衝を本拠地としていたが、この後テムジンはそこを奪い、オゴタイとの二代にわたって政権の基盤を置いた。長くモンゴル帝国の聖地ともなっていた。そんな良い所にいたジュルキンは交易によってタタルとのつながりを深くしていた可能性がある。戦いの最中にテムジンの留守営を襲ったのがナイマンとする史料もあり、ジュルキンとする史料もあるがあまり問題ではない。ナイマンが襲おうとすれば、ジュルキンの土地を通るはずなので、黙認していたという事になり同罪である。あるいは、ジュルキンが赤い帽子をかぶってナイマンに変装していたので、ナイマン説とジュルキン説の二つが生じた可能性もある。これらはこのHPの中の、「キジル・バシの地」と「いくつかの地名」の中で既に考察した(4,5)。

既に述べたが、この事件の前年の1995年、タタルのセチュなる首領が金軍と争いを起こした。このセチュをジュルキンのサチャ・ベキの事と考える論者もいる(6)。メグジン・セウルトの逃走方向を見れば、ジュルキンの方向を目指しているようにも見える。ジュルキンが実利のためにタタル、ナイマンとも付き合っていたとすれば、彼らがテムジンの呼びかけに応じなかったことは大いにあり得ることである。

## 4. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1, 2, 3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983)、商務印書館、北京

：ドーソン著、佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京



『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版(1910)，国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<参考資料>

- (1) 安田公男(2020)「ジャムカとの戦いーチンギス・カンの前半生その4ー」8頁、HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)
- (2) 白石典之(2015)「チンギス・カンとその時代」123-127頁、勉誠出版、東京
- (3) 白石典之(2016)「斡里札河の戦いにおける金軍の経路」(内陸アジア史研究 27-48頁)
- (4) 安田公男(2020)「キジル・バシの地」モンゴル史の地名その3、HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)
- (5) 安田公男(2019)「いくつかの地名」モンゴル史の地名その4、HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)
- (6) 書籍名、著者名共に失念

以上

**\*注**

コロナウイルス肺炎防止対策で 2020/05/06 まで図書館の利用が出来ない。参考にしたい資料があるが手持ちの資料だけで論を進めた。誤りや抜け落ちがあれば後で訂正する。

改訂履歴

2020年5月5日 初版

